



後朱雀天皇の乳母達

陳, 斐寧

(Citation)

國文論叢, 35:1-15

(Issue Date)

2004-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011602>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011602>



後朱雀天皇の乳母達

はじめに

『栄花物語』や『紫式部日記』における後朱雀天皇（敦良親王）は、兄の後一条天皇（敦成親王）と比べると、その描写が極めて少ない。たとえば、最も重要な誕生について、後一条天皇の場合『栄花物語』巻第八「はつはな」に詳述され、巻第十一「つぼみ花」には栄花の初花と賛美されている。そして初花巻が依拠した『紫式部日記』には誕生から御湯殿、三日、五日、七日、九日の産養、五十日の祝、参内など誕生前後の一連の諸行事が盛儀として描かれている¹。しかしながら、その翌年の寛弘六年（一〇〇九）十一月二十五日に誕生した後朱雀天皇の場合については、『紫式部日記』は単に五十日の祝に触れるだけであり、『栄花物語』巻第八「はつはな」には「すべて何ごと、ただはじめの例を一つ違へず引かせたまふ」²（①四四一頁）と付言され、詳細は記されていない。先例化されたと指摘されているように、敦成親王の時に従って、すべては同様であり、一切相違はないと簡単に記されているように見える。『栄花物語』や『紫式部日記』にお

陳 斐 寧

ける敦良親王の誕生は看過され、つまり敦良親王に関するものは敦成親王の例を参照させることによって省略されているのである。では他史料はどうであろう。現存資料のなかで敦良親王の誕生を最も詳しく記しているのは『御堂閔白記』である。それによると、その日に「共御湯宰相乳母（傳女子）」と、記載されているように、東宮傳である藤原道綱の娘の豊子が御湯殿に奉仕した一文がある³。「はじめの例」である敦成親王の場合と引き比べてみよう。敦成親王の誕生の時に御湯殿に奉仕した人は、同じく藤原豊子であった⁴。ここから、『栄花物語』に記された「ただはじめの例を一つ違へず」の一句は史実をふまえたものだと思われる。要するに、敦良親王は、その描写に独自性がなく、あらゆるものに関し、まるで兄の敦成親王に付属しているかのように見える。

ところで、『栄花物語』巻第二十七「ころものたま」に、後一条天皇が御悩を記すところに、「かかるほどに、内の御悩のことありて、いと世の中もの騒がし。さまざまの御物の怪どもいみじうこはし。（略）東宮の御乳母などの、貴船に祈り申したるなどいふことさへ御物の怪申すを、大宮いと聞きにくく、かたはらい

たく思さるべし」(③七五頁)とあり、東宮敦良親王の乳母達の呪詛が後一条天皇の御悩の原因の一つであったと記されている。

ここから、敦成親王と敦良親王は、誕生からの通過儀礼は全く同様であるかのごとく記されているものの、少なくとも乳母達の立場は違うのだと知られる。その乳母達の存在が、殆ど描写されない主君とは違って、物語の作者の注目的になっている。『栄花物語』巻第十三「ゆふしで」にも、小一条院敦明親王が退位する時に「東宮の御乳母たち、つひの御ことながら、たちまちのこととは思ひかけざりつるに、あさましううれしきに詮方なし」(②一一〇頁)とあるように、敦良親王の乳母達が嬉しい気持ちで隠さなかったという描写がある。主君とは対照的に、後朱雀天皇の乳母達が確実に注目されている。しかも主君を強力に擁護する乳母の姿を描くことは、『栄花物語』の性格の一面を示している。

『栄花物語』作者論として考える場合、作者が乳母か、または少なくとも乳母に強い関心を寄せる立場の人物ではなからうか⁽⁷⁾と推定されているが、後朱雀天皇についても、その乳母達のほうが確かに興味深く叙述されている。その印象的に描かれた乳母達は、いかなる人たちであつたか、具体的にいかなる出自であるかについては、まとまった研究は見当たらない。本稿では後朱雀天皇の乳母達について推測を交えつつ、考察してみたいと思う。

一、史料にみえる後朱雀天皇の乳母達

現存史料の中で、敦良親王の乳母に関する主な資料は寛仁三年(二〇一九)八月二十八日、敦良親王の元服のことを記したものにみえる。後一条天皇は寛仁二年正月三日に元服したが、『栄花

物語』巻第十三「ゆふしで」に「よるづよりも、帝今年十一にならせたまへば、正月三日御元服の事あり。そのほどの有様思ひやるべし」(②一二八頁)と描かれているが、敦良親王の元服については、『栄花物語』には一切言及されていない。ところが、道長の『御堂関白記』、実資の『小右記』、経頼の『左経記』それぞれに詳細に書きとめられている。それらを見れば、敦良親王の加冠・理髪の後には台盤所で御乳母・宣旨の加階を行ったことが知られる⁽⁸⁾。また、後世の『伏見宮御記録』の蔵書群の一つである『光厳帝宸記之写』⁽⁹⁾には、最も注目すべき内容が残っている。『御堂関白記』『小右記』『左経記』などに明記されていない「宣旨御乳母人数事」ではある。そこに加階された女房の名前が記載されている。古代の女房名を明らかにするのは、極めて困難であるから、実名が残っているのは珍しいと言えよう。『大日本史料』寛仁三年八月二十三日条掲載の『光厳帝宸記之写』を見ると、加階を蒙った宣旨・御乳母について、以下のように書かれている。

一、宣旨・御乳母人数事⁽¹⁰⁾

寛仁 従四位下 藤豊子^{御乳母} 正五位下 藤姫子^{宣旨}

従五位上 源涉子^{御乳母} 大宮宣旨

藤能子^{同式部}

従五位下 藤明子^同 弁

以上参台盤所云々

と記されている。これは、『左経記』寛仁三年八月二十八日条の「又宣旨乳母等参大監(盤カ)所申加階慶各禄」によっても裏付けられる。しかも『左経記』などに明示されていない位階・実名・官職・女房名が知られ、後朱雀天皇の乳母達の全体像につい

て、まず貴重な手掛かりを得ることができるのである。しかし、各乳母の出自については詳らかに記されていない。

さて、『光厳帝宸記之写』によれば、後朱雀天皇には宣旨の藤原姫子を除いて、六名の乳母がいた。藤原氏四名に源氏二名であるかと思えるが、このうち「同（藤原 香子）」という人物は、本来「同」ではなく、「源」香子であるべきであると、橋本義彦氏が諸本校合の後に指摘されたように、正しくは、藤原氏三名と源氏三名という構成であろう。因みに、称呼・官職によって整理すると以下のようなふうになる。

乳母	藤原豊子	（典侍）
乳母	源陟子	（大宮宣旨）
乳母	源隆子	（中務）
乳母	藤原能子	（式部）
乳母	源香子	（式部）
乳母	藤原明子	（弁）

このように、乳母が実名とともに知られる。ここから、乳母達の出自や経歴をあぶり出す材料が得られる。次の作業は『光厳帝宸記之写』以外の諸記録から後朱雀天皇の乳母達に関する資料を求めることである。周知のように、後朱雀朝は遺存する古記録は多くないが、幸いに資房の『春記』と『左経記』から幾つかの手掛かりが得られる。特に、『春記』の中に、乳母に関する資料が遠く形で記されている。長暦三年十二月十六日条に、「而経成更被加任事（略）依御乳母智敷云々」、さらに長久元年十一月二十七日条にも、「又故兼貞朝臣後家（御乳母也）、前典侍（略）」などと記されているのである。

二、個々の人物像をめぐる

『光厳帝宸記之写』に記されている六名の中、典侍の乳母、藤原豊子は後一条天皇の乳母として知られている。藤原道綱女として生まれた豊子は、中宮彰子に仕えていた女房で、寛弘五年、敦成親王が誕生した時に御湯殿に奉仕したことは、『栄花物語』や『紫式部日記』に記述されている。また、前述したように、敦良親王が誕生した時にも、同じく御湯殿に奉仕したのである。そのため、敦良親王の乳母の一人に数えられることになったのである。母を同じくする敦成親王と敦良親王兄弟の養育係として、彰子に仕える上臈女房である豊子が加わったのであろう。先学諸論の考証によれば、宰相典侍の藤原豊子を除いて、そのほかの五人は後一条天皇の乳母ではなかったことがわかる。ではほかの五人については、詳しい経歴はどのようなものであったのか。個々に追えることにしたいと思う。

その1、大宮宣旨乳母の源陟子

まず、「大宮宣旨」源陟子から見よう。寛仁三年八月二十八日、敦良親王が加冠した折に加階を蒙った女房のうち、「宣旨」と呼ばれる女性が二人いたが、一人は藤原姫子である。彼女は乳母であると記されていないので、考察から除く。残った一人は、「大宮宣旨」と呼ばれる源陟子である。皇太后か太皇太后宮を大宮と称するから、後一条天皇の治世である寛仁三年は、道長の三女の威子が中宮、二女の妍子が皇太后、長女の彰子が太皇太后であるので、敦良親王の乳母たる「大宮宣旨」源陟子は、太皇

太后の彰子に仕えた人物であると、知られる。そして、そもそも宣旨という名で呼ばれる女房は、立后の時、その宣旨を取り伝えたものであるから、後朱雀天皇の乳母である「大宮宣旨」源陟子は、彰子が立后した時に、その宣旨を伝える役を果たしたのであろう。源陟子は彰子の女房として仕えていた。

さて、宣旨という人物に関しては、『栄花物語』巻第八「はつはな」の、寛弘五年十一月十七日に、その三ヶ月前に誕生したばかりの敦成親王とともに始めて彰子が土御門第から内裏に還幸したことを記す条に、「御輿には、宣旨の君乗りたまふ」(①四二二頁)とある。「宣旨の君」が彰子と同じ御輿に乗ったのであった。『紫式部日記』にも「御輿には、宮の宣旨乗る。糸毛の御車に、殿の上、少輔の乳母若宮抱きたてまつりて乗る」(一二二頁)と描かれている。では、この人物が寛弘六年に誕生した敦良親王の乳母たる「大宮宣旨」に当たるかどうかが、先ずは記録類から検討しておこう。『小右記』寛弘八年七月二十六日条には、「以書状送女房許(御乳母、所謂本宮宣旨)⁽¹⁸⁾」と見える。「本宮宣旨」という人物が「御乳母」であることが確かめられる。そうすると、「光厳帝宸記之写」と照合すれば、「大宮宣旨」も「本宮(彰子)宣旨」も「御乳母」であり、おそらく敦良親王の乳母と考えてよいであろうから、同人とみることはできよう。その名は源陟子となる。ここから考えるに、中宮彰子付きの女房「宣旨」源陟子が寛弘六年に乳母に選定されたのは、『栄花物語』や『紫式部日記』の記述から見られるように、彼女が彰子の女房の中で、上臈の地位にあって重んじられていたからであろう。源陟子が敦成親王が誕生した時に「宣旨の君」「宮の宣旨」と呼ばれたのは、彼女は

寛弘五年の時点にまだ乳母となっていないからであろう。そして、敦良親王が誕生した寛弘六年から乳母となり、寛弘八年に実資が「本宮宣旨」は即ち「御乳母」であると記載したのである。一方、『御堂関白記』長和元年(一〇一二)閏十月二十七日条には、大嘗会の御祓の日に供奉する女房達の車の記述に「乗車女方皇太后宮宣旨(伊陟女子)(略)乗車女(東宮宣旨、扶義女子)」とある。長和元年の時点では、敦成親王が東宮であるので、敦成親王の宣旨なる人物が扶義女であることがわかる。この記事から「宣旨」と名乗る女性には、源扶義女「東宮宣旨」と、源伊陟女「皇太后宮宣旨」がいることが知られる。ここで注目したいのは、「皇太后宮宣旨(伊陟女子)」の一節である。既に述べたように、「大宮宣旨」も「本宮宣旨」も源陟子を指していることがわかったが、長和元年の「皇太后宮」は彰子であるので、この「皇太后宮宣旨」も源陟子であると判断せねばならない。これまで述べてきたところをまとめれば、源陟子が「大宮宣旨」「本宮宣旨」「皇太后宣旨」と呼ばれていることがわかる。その上、「御堂」の割注によれば、彼女は源伊陟の女であることが知られるのである。『公卿補任』によれば、伊陟の極官は中納言であった。そうすると、彰子が万寿三年に出家する当日の有様を描く条に「源三位、伊勢の中將、中納言の尼など皆参りたり」(『栄花物語』③五八頁)とある。彰子の出家以前に落飾した「中納言の尼」がいることが知られるが、あるいはこの「中納言の尼」が源陟子か。『院号定部類記』所引の「権記」に、彰子に従い出家した女房として「宮宣旨(故伊陟女中納言女)(略)」の名がみえ、敦良親王の乳母である源陟子は養君の母、彰子の出家に伴って自身も万寿三年(一〇

二六）正月十九日に出家したのであった。すると、『栄花物語』の「中納言の尼」は源陟子とは別人とすべきであろうか。

その2、中務乳母の源隆子

次に中務乳母と呼ばれる源隆子を見てみよう。敦良親王の乳母の中務という人物は『紫式部日記』にみえる。寛弘七年正月十五日の敦良親王の五十日祝の場面を叙述する前に、「中務の乳母」に関する描写がある。「ただ渡殿の上のほどをほのかに見て、中務の乳母と、よべの御口ずさみをめできこゆ。この命婦こそ、ものの心得て、かどかどしくははべる人なれ」（二一八頁）²⁰とあり、敦良親王の乳母「中務の乳母」を褒めている。そして、五十日祝の本番の描写には「中務の乳母、宮抱きたてまつりて、御帳のはさまより南ざまにゐてたてまつる」（二一九頁）とみえる。『紫式部日記』にみえる「中務の乳母」という人物は、『光厳帝宸記之写』とつきあわせると、源隆子であることがわかる。敦良親王の五十日祝の場面のほかに、たとえば、寛弘五年十一月一日の敦成親王の五十日祝を記すところにも源隆子は登場している。『栄花物語』巻第八「はつはな」に「若宮の御まかなひ、大納言の君なり。東の御簾子すこし上げて、弁内侍、中務命婦、大輔命婦、中將の君など、さるべきかぎり取りつづきまゐらせたまふ」（一四一八頁）とある。「中務命婦」源隆子は敦成親王の五十日祝においても若宮の御膳の益具に奉仕したことがわかるのである。また、『紫式部日記』には、皇子の誕生を待ち望む人々の描写に、「いま一間にあたる人々、大納言の君、少少將の君、宮の内侍、弁の内侍、中務の君、大輔の命婦、大式部のおもと、殿

の宣旨よ（略）また、そのうしろのきはに立てたる几帳の外に尚侍の中務の乳母、姫君の少納言の乳母（略）」（一三三頁）とあるが、ここには「中務の君」と「尚侍の中務の乳母」と「中務」を冠する二人の女性のみえる。「中務」と名乗る人物は源隆子の他に、「尚侍（妍子）」の乳母となった「中務典侍」藤原高子²¹という女性もいることが紛らわしさをもたらすのである。この「中務の君」なる人も源隆子を指すのであろう。敦良親王の乳母、源隆子は敦成親王の誕生や五十日祝にも奉仕したが、その時に「中務の君」や「中務の命婦」という称呼で呼ばれた理由は、彼女がまだ乳母になつていなかったからであらう。つまり、源隆子は寛弘六年十一月に敦良親王が誕生し、敦良親王の乳母になったことをきっかけに、「中務の乳母」という名で呼ばれ始めたのであろう。

では、源隆子の出自はどうであらう。『公卿補任』によれば、後冷泉朝の康平八年（一〇六五）に、参議従三位藤原泰憲の説明には「故春宮亮泰通朝臣二男。母従三位源（朝臣さく）隆子（紀伊守致時女。先帝御乳母）」がみえる。おそらく文徳源氏出身である紀伊守、源致時の娘に藤原泰通の妻となり、藤原泰憲を生み、従三位と叙された先帝（後朱雀天皇）御乳母源隆子という女性が後朱雀天皇の「中務の乳母」源隆子と同人であると、判断してよからう。そして、『小右記』に治安元年（一一〇二）前美濃守泰通が春宮（敦良親王）亮に任じられた記事が見え、泰通が春宮亮に任じられたのは、妻の源隆子が東宮の乳母であることと関連しているのであろうし、また『公卿補任』には、泰憲が治暦三年（一一六七）正月五日に正三位に叙された時、「後朱雀院坊官賞」。

超資綱顕家能季等」との説明がみえ、その上に「超上首三人加級例」と注を付すように、この強行的な叙位には母が後朱雀天皇の「三位の中務乳母」であるゆえの強縁関係にあるとも言えよう。

その3、式部乳母の藤原能子

後朱雀天皇の乳母の中で、「式部乳母」と呼ばれる女房が二人いることが「光厳帝宸記之写」からわかる。一人の名が藤原能子で、もう一人の名が源香子であることが明記されている。では、まず藤原能子をめぐる資料について整理しておこう。記録類を調べれば、藤原能子の名の初出は寛弘八年（一〇一一）六月十三日の「少将典侍能子」、「内侍一人（能子少将）」であり、次に長和元年（一〇一一）閏十月二日に「内侍能子」が、内侍順子の代わりに御襖に供奉したことがみえ、そして寛仁二年（一〇一八）九月八日に齋宮群行の時に「掌侍藤原能子」が「典侍藤原豊子」の代わりに車に乗ったことがみえる。能子は、「少将典侍」（『踐祚部類抄』）、「少将内侍」（『権記』）、「少将掌侍」（『御堂閨白記』）と呼ばれていた。そのほかに、実名は記されないが、長和四年（一〇一五）七月二十三日に、加賀守源政職の妾なる「掌侍少将」がみえ、また万寿三年（一〇二六）十二月十五日にも章子内親王の七夜に禄を賜る「少将典侍」なる女房がみえる。一条、三条、後一条朝における「少将」という女房名を持つ「内侍」「掌侍」「典侍」が全部「能子」を指すとは考えられないだろう。能子は寛仁二年ごろまでは掌侍であった。後に典侍となったのであろう。『紫式部日記』の敦成親王誕生の七日の御産養の前日に彰子周囲の女房が参加した月夜の舟遊びの描写において藤原能子

が「藤少将の命婦」として呼ばれていた。⁽²⁹⁾ 藤原能子は「光厳帝宸記之写」に記載された「式部乳母」ではなく、その当時の資料には、彼女は「少将の内侍（掌侍）」、「少将の典侍」のように「少将」の名を冠して呼ばれていたのである。例えば、長暦二年（一〇三八）九月十三日に、権大納言師房主催の歌合に、「少将乳母」と呼ばれる読み人がみえ、長暦が即ち後朱雀朝の御世であることが明白であるように、おそらく「少将乳母」は、「少将内侍」と呼ばれる能子が後朱雀天皇の乳母となることを裏づけると考えられよう。かかるように、「少将乳母」とも称するのだろう。さて彼女の出自についてあるが、『枕草子』に注目すべき記載がある。一〇〇段「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など」には「相尹の馬頭のむすめ少将、北野宰相のむすめ宰相の君などぞ近うはある」とある（二〇二頁）。相尹女「少将」が藤原能子であるかもしれない。また、『春記』長久元年五月二十四日条に「中将典侍（相尹女）」との記載がある。『春記』によれば、相尹女「少将」には、妹とおぼしき「中将典侍」がいたことが知られる。⁽³³⁾ さらに、『枕草子』八六段「舞姫は、相尹の馬頭のむすめ、染殿の式部卿宮の上（為平親王室、高明女）の御おとうとの四の君の御腹、十二にていとをかしげなりき」とあるように、相尹の妻に、源高明の「四の君」があり、この「舞姫」は相尹女「少将」の妹にあたるかと思われる。『舞姫』と「少将」が同母姉妹であれば、「少将」の母は高明女ということになる。相尹女「少将」が能子であるとすれば、藤原能子は、師輔の孫、相尹を父に持ち、母は高明女であったかとも思われる。しかし、相尹女「少将」と能子が同人であるとすれば、相尹女能子はまず道隆女、原

子に仕え、後に道長女、彰子に仕えることになったことになり、中関白家が急速に没落するなか、道長方にとり込まれていく波瀾に満ちた生き様を思い浮かべる必要がある。先にあげた『御堂関白記』長和四年七月二十三日条にみえる「掌侍少将」が能子であるならば、能子は源政職³⁵の妾妻であつたことが知られる。

ところで、記録上には後一条朝以後、能子の名が見えないのは、何故であろうか。『栄花物語』巻第二十七「ころものたま」はその理由を仄めかす手掛かりを提供している。「そのこと違へず、世を背き、同じ道に入る人々、少将の内侍、弁の君、弁の内侍、染殿の中將、筑前の命婦などなり」(③五九頁)と、彰子が万寿三年に出家した時のことを記している。この「少将の内侍」が藤原能子のことを指しているとすれば、彼女は主君の彰子の出家とともに忠誠を尽くして出家したと考えられる。長元四年九月二十五日彰子が石清水、住吉に詣でた時に藤原能子が「少将の尼君」という名で『栄花物語』に登場してもいる。能子が相尹女であれば、能子は相尹の官職名に因んで「少将」と呼ばれたのであろう。また、能子の妹が後朱雀朝において典侍となっているのも能子の何らかの働きかけによるものと推測される³⁷。

その4、式部乳母の源香子

さて、もう一人「式部の乳母」と呼ばれる源香子ほどのような人物だったのであろう。源香子の名前で調べてみると、古記録には当てはまる女房は見当たらないが、『紫式部日記』には「源式部」と呼ばれる人物が記載されている。まず、『紫式部日記』から検討していきたい。寛弘五年九月十五日、敦成親王の五日夜の

産養の記事に、「髪上げたる女房は源式部(加賀の守景ふがむすめ)(略)かたちなどをかしき若人のかぎりにて(略)」(一四三頁)³⁸とあり、その夜、奉仕した女房の中に「源式部」と呼ばれる人物がいる。また、九月十六日の夜にも「若き人は舟にのりて遊ぶ。色々なるをりよりも、おなじさまにさうぞきたる、様態、髪のほど、くもりなく見ゆ。小大輔、源式部」(一四六頁)とあり、源式部が再び登場している。「若人の中もかたちよしと思へるは、小大輔、源式部など」(一九一頁)とあるように、その容姿を紫式部が賞賛している。さらに寛弘七年正月十五日に、敦良親王の五十日祝の夜に、「上人ども十七人ぞ、宮の御方にまゐりたる。いと宮の御まかなひは橘の三位。とりつぐ人は、はしに小大輔、源式部、内には少少将」(二一九頁)とあり、敦良親王の御膳の益具に奉仕している。そして、『紫式部日記』の「源式部」に「加賀の守景ふがむすめ」(一四三頁)³⁹と割注が付され、源式部の出自に関する記載が見られる。萩谷朴氏は諸写本の字形から加賀守源重文と論じられている⁴⁰。『紫式部日記』から得られた情報を整理すると、「源式部」と呼ばれる加賀守源重文の娘は、敦良親王の五十日祝の時に奉仕したことがわかる。この源重文女「源式部」が後朱雀天皇の「式部乳母」源香子と同一かどうかは、判断できかねるのである。

ところで、紫式部が「源式部」と呼び、寛弘年間内裏の女房としてつとめた加賀守源重文女については、『尊卑分脈』に面白い記載がある。藤原資業の男、実政、実家に「母加賀守重文女」と注記が付されている⁴¹。『紫式部日記』には、寛弘五年の大晦日の夜に「式部の丞資業」(一八六頁)が、宮中の灯台のさし油を注

いだ記事がみえ、資業はその時、式部丞であつたことが知られる。『尊卑分脈』の記事から考えれば、源重文女が当時式部丞であつた藤原資業と結婚し、実政と実家を生んだのだろう。恐らく、夫の資業の官職「式部少丞」に因んで、「源式部」の名で呼ばれたのだろう。そして「尊卑分脈」によれば、藤原資業には、実政、実家以外に、実綱という男子がいる。実政、実家と違って、母は藤原師長女とする。一方、『系図纂要』によると、師長女が実政の母であることが見える。従つて、資業妻には少なくとも源重文女と藤原師長女が確認できるが、実政の母については、重文女か、師長女かの混乱がみえる。

また、『後拾遺和歌集』の五六一番の歌に「後冷泉御時、暇なと申して筑紫に下り侍りけるほどに、代も変りぬと聞きて、上東門院のとはせたまひける御返りにたてまつれ侍ける（歌略 式部命婦）」という詞書があり、その詞書によれば、筑紫へ下向した「式部命婦」と呼ばれる女房が上東門院彰子と御代変りを感じ嘆息し、返歌を送ったことがみえる。この式部命婦が後冷泉天皇の時に宮仕えしていたことが窺われ、しかも後朱雀天皇の母である彰子と深い繋がりを持つていたことが知られる。ところで『新千載和歌集』には、「命婦乳母とはき所へまかりけるに、かがみをたまはすとして 上東門院⁴⁵」という詞書が付された歌があり、おそらくこの歌が筑紫に下向した「式部命婦」へ贈られた歌であると思われる。要するに『新千載』にみえる「式部命婦」と『後拾遺』にみえる「命婦乳母」は同人ではないかと思われる。「命婦乳母」は『後拾遺』『新千載』によれば、後冷泉天皇の乳母と考える他はあまるまいが、臆説を述べれば、後朱雀天皇の乳母でもあつたかもし

れない。「式部乳母」源香子とこの「命婦乳母」が同人である可能性を指摘するにとどめたい。

その5、弁乳母の藤原明子

「光厳帝宸記之写」の中で最後に残るのは、「弁乳母」藤原明子である。先ず、「弁乳母」について調べれば、『栄花物語』巻第十一「つばみ花」に、「若宮の御乳母今二人参り添ひたり。一人は安房守順時朝臣の女、弁の乳母といふ（略）」（②三四頁）とあり、禎子内親王の乳母として「弁乳母」がいたことが知られる。『尊卑分脈』に道綱孫、顕綱の項に「母弁乳母、加賀守順時女、康和五六二十七卒七十五⁴⁶」とあるから、順時女「弁乳母」は、兼経の妻となり、顕綱を生んだことが知られる。『尊卑分脈』や『栄花物語』によると、禎子内親王の「弁乳母」順時女の経歴はわかるけれど、彼女の実名は不明のままである。果たしてこの順時女が、敦良親王の乳母「弁乳母」藤原明子と同人であるか否か、はつきりした断定を躊躇せざるをえないのである。したがって、まずは、両者は別人と考えて、ほかに藤原明子と看做される可能性のある人物を追求してみよう。

さて、『春記』に注目される記載が見られる。長暦二年（一〇三八）十月八日条に「故兼貞後家前典侍（御乳母）」、長久元年（一〇四〇）十一月二十七日条に「又故兼貞朝臣後家（御乳母也）前典侍⁴⁷」と記されている。後朱雀天皇には「典侍」であつた乳母がおり、兼貞の後家であると説明している。『尊卑分脈』にもう一つ見逃しがたい資料がある。兼貞の男に政兼が記載されている。そして政兼の傍注に「母播磨守説孝女」との説明がなされ

ているのである。「説孝女」が、兼貞妻となり、政兼を生み、後朱雀天皇の乳母となり、「典侍」と呼ばれた可能性を見出し得る。そして、彼女の父、藤原説孝の経歴を調べれば、左少弁、権左中弁、左中弁、右大弁、左大弁⁽⁴⁸⁾など、弁官を歴任した人物であると気づく。後朱雀天皇の乳母「前典侍」説孝女が、父の藤原説孝の官職名に因んで「弁の乳母」と呼ばれたとも考えられるのである。そうすると、この説孝女を、『光厳帝宸記之写』に記載された藤原明子と判断することもできようか。要するに、前述した禎子内親王の乳母なる順時女ではなく、藤原説孝女で兼貞妻となった人物が後朱雀天皇の「弁乳母」藤原明子であったのではなかろうか。さらに、彼女の身辺を探ってみれば、説孝室には源典侍という女性がいる。彼女は、三条天皇の乳母としてつとめた経歴があり、また、彼女の母、紀頼子は円融天皇の乳母であることが知られるように、おそらく説孝女藤原明子が後朱雀天皇の乳母になるのは、その乳母家系と大きな関係があるといえるであろう。ということでは、後朱雀天皇の「弁の乳母」藤原明子が、説孝女である可能性も捨てきれないのである。

なお、『栄花物語』巻第八「はつはな」には敦成親王の五十日祝の夜に「東の御簾すこし上げて、弁内侍、中務命婦、大輔命婦、中将の君など」(①四一八頁)とある。すでに述べたように、「中務命婦」は「中務乳母」源隆子である。この「弁内侍」も、おそらくのちに(寛弘六年)敦良親王の乳母となつて「弁乳母」と呼ばれた藤原明子であると、想定してよからうか。また、『栄花物語』巻第二十七「ころもなたま」に、万寿三年正月に彰子が出家する時に「そのこと違へず、世を背き、同じ道に入る人々、少将

の内侍、弁の君、弁の内侍、染殿の中將、筑前の命婦などなり」(③五九頁)とあるが、彰子とともに出家した女房の一人、この「弁の内侍」も藤原明子であるかもしれない。このように、万寿三年の出家により、乳母を辞め、内裏から退出したのだろう。そして、明子が出家しても、彼女は後朱雀天皇の乳母である経歴は変わらないので、資房が長暦二年、長久元年に説孝女なる藤原明子を「御乳母也」「前典侍」と記したのであろう。

三、可能性としての菅野敦頼女

以上のように考証を重ねながら、それぞれ乳母の輪郭が漸く見えてきたが、ところで、後朱雀天皇の乳母について、もう一人、その可能性のある女性のいたことが、『尊卑分脈』から浮かび上がってくる。『尊卑分脈』第三編(四一四頁)に収める宇多源氏の系図に成頼の男、義経⁽⁵²⁾には、「本名章経」「母朱雀院御乳母、菅野敦頼女」と注記が付されている。この系図を簡単に示せば「雅信—扶義—成頼—章経」となる。そこで章経の父、成頼から考えてみよう。扶義男、成頼には、兄に従三位参議の経頼がいる。また姉妹には敦成親王が誕生した時に、御迎湯に奉仕した「大納言の君」と呼ばれる源廉子⁽⁵³⁾がいる。以上のような家族構成から考えれば、『尊卑分脈』における章経の「母朱雀院御乳母」の説明について不審の念を抱くのである。祖父である扶義が一条朝、父の成頼、伯父の経頼、叔母の源廉子が皆後一条朝に奉仕したのであるから、章経の母、菅野敦頼女が「朱雀院御乳母」であるのは年代的に合わないのである。この注記は別人のものが混入した可能性を想定する必要もあろうが、「母朱雀院御乳母」の注

記は、書写の段階で「後」が抜けてしまったのではなからうか。つまり本来「母後朱雀院御乳母」とあるべきところではなからうか。そうであれば、源成頼室には後朱雀天皇の御乳母となった菅野敦頼女という女性がいて、その女性が章経を生んだのだと考えられるだろう。

一方、『平行親記』の長暦元年九月二十日条には、八十嶋祭使として派遣された人物が「今日八十嶋祭使者、典侍〔三位〕藏人〔左衛門尉章経⁵⁴〕と記されている。三位の典侍と藏人の章経であつたことがわかる。『江家次第』八十嶋祭「大嘗会次年行之、多在大神宝之後（略）次以典侍一人為使〔多用御乳母〕（略⁵⁵）」を参考にすれば、長暦元年の八十嶋祭使の三位の典侍も後朱雀天皇の御乳母であつたと思われる。

ところで、ここで気になるのが一緒に難波に出向した章経という人物である。章経を検討する前に、まずは後一条朝の八十嶋祭使を検証しておく。後一条天皇が即位した後、寛仁元年十二月二五日に八十嶋祭が行われた。『左経記』十二月十二日条に、勅使定められ、「今日典侍美子、藏人章任等、為八十嶋祭勅使（略）」と書かれている。後一条天皇の乳母、藤原美子と後一条天皇の乳母子、源章任⁵⁷——母は藤原基子⁵⁷が祭使となつた。後一条朝の例は、「御乳母」と「御乳母子」が派遣されたのが興味深い。後一条朝の八十嶋祭が前例とされたすれば、長暦元年に難波に出向した藏人章経も乳母子であつた可能性がでくる。長暦元年九月二十日に章経が藏人として八十嶋祭使をつとめたのは、後一条天皇の乳母子の源章任の場合に準じて考えることができる。つまり、彼も後朱雀天皇の乳母子であつたかもしれない。繰り返

して言うが、『尊卑分脈』によれば、彼は成頼男で、母として菅野敦頼女は相応しく、したがって菅野敦頼女は後朱雀天皇の乳母であつた可能性が認められよう。そして、おそらく成頼妻の菅野敦頼女が後朱雀天皇の乳母となつたのは、彰子の上臈女房で、成頼の姉妹なる源廉子の推薦によるものであろう。こうして、また一人、後朱雀天皇の乳母の存在が明らかになったのである。

四、結び

結果として、後朱雀天皇には少なくとも七名の乳母が存在することがわかった。藤原豊子を除く六人については、煩瑣な、しかも推測をまじえた考証の結果、その経歴や系譜について、わずかながら浮かび上がってきたのである。では、以上の考証を踏まえて、最後に一つの推測を加えたい。

源陟子の夫なる人物については、直接的な資料が見当たらないのであるが、幸いに『小右記』に手掛かりがみえる。寛仁四年十月十一日に春宮（敦良親王）のために河内守藤原方正が賀茂社に祈願をなした時に「方正妻は則御乳母也⁵⁸」とある。上述したように、後朱雀天皇の乳母のなかで、唯一結婚相手が不明なのは、「大宮宣巨」源陟子である。ほかの六名の乳母の夫はすべて直接的な資料で立証されたので、『小右記』に記載された「方正妻」が源陟子を指しているのではなからうか。そうすると、源陟子の夫が明らかになったことによつて、あと一つの不明点について、解明の糸口が見えてくる。『春記』長暦三年十二月十六日条にみえる「而経成更被加任事（略）依御乳母智卿⁵⁹」一句である。後朱雀朝の長暦三年十二月の叙位に、少納言源経成が左少弁に任ぜら

れたのであるが、「それは経成妻の母が今上帝の乳母のため」であると、当時の蔵人頭の藤原資房に記載されている。では源経成の妻の母を探ってみよう。『公卿補任』には堀河嘉承元年（一一〇六）に、詳しい記載がみえる。参議正四位上源重資の項目に「故権中納言経成卿男。母故春宮亮藤原泰通朝臣女」との説明がある。そこから、源経成が藤原泰通女と結婚し、源重資が生まれた系譜がみえ、そして、『春記』の記録によれば、経成妻、藤原泰通女の母は、後朱雀天皇の乳母であることがわかる。併せて考えれば、泰通妻については、「中務の乳母」と呼ばれた源隆子のことを指すのであろう。その一方、『尊卑分脈』には興味深い記載が窺える。経成男重資の項には「母春宮亮藤原泰通朝臣女」「或本」母阿波守方正女」と記されたように、『尊卑分脈』には二通りの説明を施している。要するに、重資の母なる経成妻については、泰通女と方正女なる女性のどちらか迷っているのである。この混同の発生が、おそらく、経成妻の出自から生まれたかと考えられよう。先述したように、泰通妻には後朱雀天皇の乳母なる源隆子という女性がいることが分かる一方、方正妻には同じく後朱雀天皇の乳母なる源陽子という女性がいることがわかった。そうすると、『尊卑分脈』は同じ後朱雀天皇の乳母なる「源隆子」と「源陽子」を混同して、重資の母について、結局二通りに注記を施したのではないかと理解されるのである。

注

(一) 福長進氏「栄花物語の対象化の方法―原資料を想定して読む―について」(『栄花物語研究』第一集 国書刊行会 昭和六十

年九月)、『紫式部日記』の原資料利用について「紫日記」に依拠した初花巻の場合が下部の本音とたてまえとを描き出したのとは質的に異なるが、初花巻の原資料から取用した表現が、以後の同種の記事の細部の叙述に参与しているのである(三一頁)とある。

(2) 引用は山中裕氏・秋山慶氏・池田尚隆氏・福長進氏校注、新編日本古典全集『栄花物語』(小学館 一九九五年八月)による。括弧内の算用数字は冊数、漢数字は頁数を示す。以下同。

(3) 前掲(注一) 福長氏論文に「敦成親王誕生が先例化されていることがうかがえる」(三十頁)と指摘されている。なお、中村康夫氏が「敦良親王の場合には、はつきりと「前に同じ」で処理している」と論じられる。『栄花物語の基層』(風間書房 二〇〇二年十月、五八頁)。

(4) 引用は『御堂関白記』(大日本古記録本)による。中巻三十頁。

(5) 『公卿補任』(新訂増補国史大系本)によれば、寛弘六年十一月の東宮傳は藤原道綱(大納言 正二位)。

(6) 『栄花物語』初花巻には「御湯殿は讃岐の宰相の君」、「紫式部日記」には「宰相の君」とある。諸注釈は、いずれも道綱娘の藤原豊子であるとする。

(7) 加納重文氏「作者の周辺―乳母―」『歴史物語の思想』(京都女子大学研究叢刊19平成四年十二月) 一六七頁、吉海直人氏「『栄花物語』の乳母達」『平安朝の乳母達』『源氏物語』への階梯(世界思想社 一九九五年九月、三二五頁)。

(8) 『御堂関白記』(大日本古記録本 寛仁三年八月二八日条「御乳母・宣旨等給加階」、「小右記」(大日本古記録本) 寛仁三年八月二八日条「大臣以蔵人頭左中弁経通令奏詔書位記(先是被仰宮宣旨・乳母等名、可下給名簿歟(略))」、「左経記」(史料大成本) 寛仁三年八月二八日条「又宣旨乳母等参大監(盤力)所申加階慶各

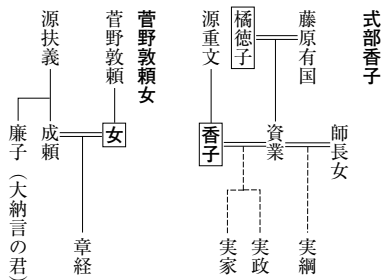
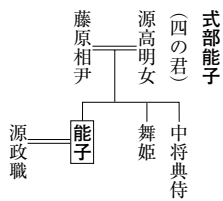
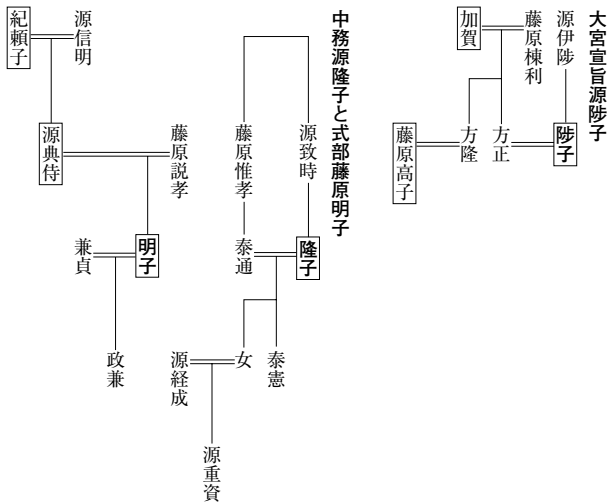
録」。

- (9) 寛仁三年正月の敦良親王の元服記録として、『光厳帝宸記之写』と名付けられ、『大日本史料』寛仁三年八月二十八日条に引載されたのであるが、そもそも「伏見宮御記録」という北朝伏見宮家の蔵書群の一つであり、「伏見宮御記録」はまた「伏見宮記録文書」と称され、特に音楽関係、例えば秘曲御伝授記、琵琶灌頂次第、宰相承系図等を収む。
- (10) 『光厳帝宸記之写』の引用は『大日本史料』第二編第十四冊（東京大学史料編纂所）三百七十二頁による。
- (11) 橋本義彦氏が『大日本史料』寛仁三年八月二十八日条に引載する『伏見宮御記録』の「光厳帝宸記之写」について、「伏見宮御記録」にはかなり誤写が多いので、書陵部所蔵の原本（現書名は「東宮御元服勘例」）について調べてみると、問題の箇所は「源香子」とあり、「同」は「源」の誤写と判明する。しかも東洋文庫蔵広橋本「東宮御元服部類記」所収の「行成卿記」にも、この記文に対応する記事があり、そこにも「源香子御乳母式部」と明記している。」と指摘された。「古記録誤写誤読」「平安貴族」（平凡社選書 一九八六年八月、二五八頁）。
- (12) 『春記』（増補史料大成本）長暦三年十二月十六日条。八十頁。長暦二年十月八日条にも「又故兼貞後家前典侍（御乳母）」と、長暦三年十二月十六日条と同じ記載が見える。
- (13) 角田文衛氏「後一条天皇の乳母たち」『王朝の明暗』（東京堂出版 昭和五十二年三月）参照。
- (14) 前掲（注13）角田氏論文。萩谷朴氏「紫式部日記全注釈」上巻一〇四頁から一一四頁には、敦成親王の御乳母七人についての考証が見える。
- (15) 和田英松氏『新訂 官職要解』（講談社学術文庫 二〇〇〇年六月）七十八頁参照。
- (16) 宣旨については（注15）前掲書、一三四頁。
- (17) 新編全集『栄花物語』（①四三二頁）頭注に「源伊陟女、陟子。中宮の上臈女房」とある。
- (18) 「小右記」（大日本古記録本）第二巻、一八六頁。
- (19) 新編全集『栄花物語』巻二十七「ころものたま」（③五八頁）の頭注に「院号定部類記 所引の『権記』に「宮宣旨（故伊陟中納言女、弁内侍（故順時朝臣女、大弁、大輔、大進、筑前命婦、尼ト為ル、ト云々）」とある。
- (20) 引用は藤岡忠美氏・中野幸一氏・大養廉氏・石井文夫氏校注、新編日本古典全集『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』（小学館 二〇〇一年四月）による。数字は頁数を表す。以下同。
- (21) 杉崎重遠氏「中務典侍」『王朝歌人伝の研究』（新典社研究叢書15新典社 昭和六十二年三月）。なお、藤原高子が後に藤原灝子に改名した説もある。詳細は、角田文衛氏「中務典侍」『平安人物志』下（角田文衛著作集6 法蔵館 昭和六十年七月）参照。
- (22) 「小右記」（大日本古記録本）治安元年八月二十九日条「前美乃守泰通任春宮高」^{（卷）}。
- (23) 『新校群書類従』（卷三三）所収の『踐祚部類鈔』に、「三条院寛弘八年六月十三日乙卯受禪（略）劍璽使（或云少将典侍能子持劍）」とある。
- (24) 「権記」（増補史料大成本）寛弘八年六月十三日条「御讓位也（略）内侍一人（能子、少将、）出自御簾中、取表函奏覽（略）」。
- (25) 「御堂関白記」（大日本古記録本）長和元年閏十月二日条に「略」可供奉御襖内侍順子、依假改仰能子者、件内侍依供奉大嘗会事」。中巻、一七三頁。

- (26) 『御堂関白記』(大日本古記録本)寛仁二年九月八日条「(略)典侍藤原豊子申障、仍以掌侍藤原能子為代官、乗車」。下巻、一七五頁。
- (27) 『御堂関白記』(大日本古記録本)長和四年七月二十三日条「(略)依掌侍少将愁、召〔兵脱〕部少輔為忠、聞事、加賀守正職件宮御封物未弁、妾宅宅被封事也、可免由有御返事〔略〕」。下巻、二十頁。
- (28) 『左経記』(史料大成本)万寿三年十二月十五日条。「次内女房賜物、御乳母二人、(割注略)、少将典侍、(割注略)、内侍五人(略)」一九九頁。
- (29) 『紫式部日記』(一九)「北の陣に車あまたありといふは、上人どもなりけり。藤三位をはじめにて、侍従の命婦、藤少将の命婦、馬の命婦、左近の命婦、筑前の命婦、少輔の命婦、近江の命婦などぞ聞こえはべりし」(新編全集一四七頁)の「藤少将の命婦」注には「内裏女房。藤原能子」とある。
- (30) 敦成親王の誕生した寛弘五年には、藤原能子は「典侍」ではなく、「掌侍」であろう。敦良親王の乳母となり、その功で「典侍」に叙位されたのであろう。
- (31) 萩谷朴氏校注『平安朝歌合大成三』所収の「権大納言師房歌合」による。
- (32) 引用は松尾聡氏・永井和子氏校注、新編日本古典全集「枕草子」(小学館 一九九七年十一月)。括弧内の漢数字は頁数を示す。以下同。
- (33) 『春記』長久元年五月二十四日条「少将掌侍従者女、去夜拷諛指申云、中将典侍〔相尹女〕従女所為也」がある。萩谷朴氏『紫式部日記全注釈』上巻(角川書店 昭和四十八年三月)三九七頁には、『春記』長久元年五月二十四日条に出た「中将典侍」を「馬中将」に比定する解釈がみえる。なお、『枕草子』には「相尹の馬頭
- のむすめ、染殿の式部卿宮の上の御おとうとの四の君の御腹」とある。『采花物語』巻第二十七「ころものたま」に「そのこと違へず、世を背き、同じ道に入る人々、少将の内侍、弁の君、弁の内侍、染殿の中将、筑前の命婦などなり」(③五九頁)みえる「染殿の中将」とはどんな関わりがあるのかは、後考を俟つ。
- (34) 新編全集『枕草子』一七二頁。なおこの五節の舞姫は、馬の中将である説がみえる。前掲(注33)参照。
- (35) 正職妾に関する記事は(注27)前掲書を参照。なお横野廣造氏『平安人名辞典―長保二年』(高科書店 一九九三年二月)には、源政職と同一人物であるという説がみえる。
- (36) 『采花物語』巻第三十一「殿上の花見」かくて長元四年九月二五日、女院、住吉、石清水に詣でさせたまふ。(略)一の車には尼四人、弁の尼、弁の命婦、左近の命婦、少将の尼君(略)③二〇二頁から③二〇三頁。
- (37) 藤原相尹の官職については永延二年三月二十一日条「五位六人(略)右少将相尹(略)〔小右記〕、正暦元年七月十九日条「左少将相尹」〔小右記〕などの記述がみえる。
- (38) 原文の引用は、新編全集による。以下同。
- (39) 邦高親王本系統の諸本には「景ふ」「景婦」「京婦」「景好」、絵詞本文には「しけのふ」とあり、混乱が見える。詳細は、萩谷朴氏『紫式部日記全注釈』上巻(二八九頁)を参照。
- (40) 前掲書(注39)萩谷氏が角田氏の説を踏まえ、加賀守源重文であると論がある。なお、角田文衛氏「紫式部の本名」『源氏物語Ⅱ 日本文学研究資料叢書』(有精堂 昭和四十五年五月)に、源重文女の源式部が源満政女を母としていて、源満政が道長に深く取り入っていた関係から源式部の中宮出仕を説明する論が見える。

- (41) 『尊卑分脈』(新訂増補国史大系本第五九卷) 第二編、二〇三頁。
- (42) 『尊卑分脈』藤原資業項の注記には、寛弘三年「式部少丞、寛弘八年「右少弁、治安三年「兼式部大輔」などと記されている。
- (43) 榎野廣造氏『平安人名辞典・長保二年』(高科書店 一九九三年二月) に指摘がある。
- (44) 『後拾遺和歌集』の引用は、新日本古典文学大系(岩波書店、一九九四年四月)。
- (45) 『新千載和歌集』の引用は、新編国歌大観による。
- (46) 『尊卑分脈』(新訂増補国史大系本第五十八卷) 第一編、三四〇頁。
- (47) 『春記』(増補史料大成本) 長暦二年十月八日条、長久元年十一月二十七日条。二五六頁。(注12) 参照。
- (48) 長徳二年七月二十日条「略」左少弁説孝朝臣「略」(『小右記』)、長徳四年十二月十三日条「權左中弁(説孝)」(『權記』)、寛弘元年七月二十三日条「左中弁説孝」(『御堂関白記』)、寛弘五年七月二十八日条「右大弁説孝正四位下也」(『小右記』)、寛弘八年八月二日条「左大弁説孝」(『小右記』) など。(『小右記』、『御堂関白記』の引用は大日本古記録本。『權記』の引用は史料大成本による)。
- (49) 『御堂関白記』(大日本古記録本) 寛弘元年十一月十五日条に「源典侍孝説(説孝) 室(孝以下三字註力)」とある。上巻、一八頁。
- (50) 角田文衛氏「源典侍のことと」『平安人物志』下(角田文衛著作集 第六巻、法蔵館 昭和六十年七月)。
- (51) 『栄花物語』巻第八「はつはな」、敦成親王の五十日祝の夜に「東の御簾すこし上げて、弁内侍、中務命婦、大輔命婦、中将の君など」(①四一八頁) と、一条帝が土御門第に行幸する時に「弁内侍、左衛門内侍などぞ参れる」(①四一三頁) と描写された「弁内侍」について、新編全集の頭注に「『小右記』長和二年(一〇一三)二月十日条に「掌侍藤原[子号弁]とみえる人物か」と示す恐らく「小右記」における欠字は左大弁説孝女の藤原「明」子であろう。
- (52) 『尊卑分脈』第三編(四一四頁)「義経」に関する校訂付記には、「義経、脇本前本閣本接続上文成順、今附載、以脇本為底本」と見え、扶義流と説明している。
- (53) 『栄花物語』巻第八「はつはな」「御湯殿は讃岐の宰相の君、御むかへ湯は大納言の君なり」(①四〇四頁)、『紫式部日記』「御湯殿は宰相の君、御迎へ湯、大納言の君(源廉子)」(二三八頁)。
- (54) 『平行親記』の引用は、『続々群書類従』所収の「平記」による。
- (55) 『江家次第』(新訂増補故実叢書 巻第十五踐祚下「八十鳥祭」項。四三六頁、四三七頁
- (56) 『左経記』(史料大成本) 寛仁元年十二月十二日条。五六頁。
- (57) 後一条天皇の乳母子源章任については、角田文衛氏「後一条天皇の乳母たち」「王朝の明暗」(東京堂出版 昭和五十二年三月)、田中恭子氏「紫式部日記」の「宮の内侍」、新田孝子氏「栄花物語」の女官名称「乳母」「近江の内侍」――『平安文学論集』(関根慶子博士頌賀会編 風間書房 一九九二年十月) 参照。
- (58) 『小右記』(大日本古記録本) 寛仁四年十月十一日条「青宮御祈被申賀茂之事社司令申云々、其事河内守方正妻令祈申云々、謂方正妻是則御乳母也」。第五巻、二四一頁。
- (59) 『春記』(増補史料大成本) 長暦三年十二月十六日条「但少納言経成任左少弁(略) 而経成更被加任事、(略) 依御乳母掣歟云々」。八十頁。

参考系図 (括弧内の人物は乳母になる)



(ちんひねい／神戸大学大学院生)